

エレミヤ書からみ言葉に聞くのは二か月ぶりになりますが、そのときのエレミヤ書 23 章 9 節以降に引き続き、本日の箇所も、偽りの預言者たちに対する批判の言葉が次々と寄せ来る波のように語られています。それは、彼ら預言者は神の言葉を取り次ぐべき人々なのに、まったく神の御心に反することを、あたかも神の御心であるかのように語っているからです。わたしたちでも、自分の気持ちではないこと、まるで反対のことを、自分の代理人と称する人が勝手に語ったら怒り心頭に達するでしょう。しかもその人々が世の中に大きな影響力を持っていたら、なおさらです。

それです、*「わたしはただ近くにいる神なのか、と主は言われる。わたしは遠くからの神ではないのか」* (23 節) と、さも神と親しいかのように神の名を騙る偽預言者たちの図々しい馴れ馴れしさに、*「待った」* がかけられています。また彼らの偽りが暴露されてどこへ逃げようとも、神から逃げられはしない、と釘をさされています (24 節)。

念のために申し上げれば、神が天地を満たしておられる、とは「山川草木に神宿る」というような、天地万物が神だというわけではありません。そうではなく、神が天地万物の創造者であり、すべてが神の御手のうちにある、統御しておられるということです。

「わたしはただ近くにいるだけの神なのか」との問いかけには、もう一つ、人間に都合よく操作される存在ではない、という厳然たる拒否も含まれています。とくに、人間の抱く共通の思想や主義主張の特徴には、「近さ」「親しさ」「慣れている」という性格があります。たとえば、同じ民族だとか、出身地が同じ、土地、言葉、習慣、労働形態、国などなど、何らかの共通点を結び目にしていえるのではないのでしょうか。そして、その共通性、「同じだから」というのが神であるかのように絶対化されてしまいます。たとえば、旧ロシア帝国や旧ソ連などの支配領域で「ルースキー」(ウクライナ、ベラルーシとロシアとの一体性の主張)と言ったり、中国では「中華民族」という新たな概念を造り出したり、パレスチナ地域は「神の約束の地」だとの主張、「アメリカ大陸」を「新大陸」と呼んだり(先住民無視、入植植民地主義)、日本の場合ですと、日本は「ヤマト民族、単一民族国家」だと主張して、琉球民族やアイヌ・北方民族を無視し、古代から普通に朝鮮・中国、東南アジアとの人的・物的由来で成り立ってきた事実(「原日本人」「純粋な日本人」などは存在しないのに)を認めようとしない人々が多く存在しています。それは幕末から明治期以降に作り出された幻想にすぎませんが、それが古来の伝統であるかのように思い込んでしまっているのです。そして、それらの「近しさ」が絶対化され、それを実現すること、回復することが自分たちの歴史的使命だ、神の命令だ、などと正当化して戦争を繰り返してきましたし、今も政治家や言論人、宗教家が扇動しています。

しかし、このような「近しさ」「親しさ」によって人間を決めつけ縛る間違いに陥らない

ために、わたしたちは、「敵を愛しなさい」との主イエスの言葉を思い起こす必要があります(マタイ5:43-48)。イエスは、「自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになるろうか。異邦人でさえ、同じことをしているではないか」(マタイ5:47)。と諭されました。また、旧約聖書のイザヤ書でも、「わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道はあなたたちの道とは異なると、主は言われる」(イザヤ55:8)と告げられています。

つぎに、偽りの預言者たちが主の言葉ではなく、自分の見た夢(心の幻、思い込み)を語り、それを「主の託宣」と称して絶対化し、互いに夢を解き明かして、民を惑わせ、主の名を忘れさせている、と告発されています。たしかに夢によって神が何かを示されるというのは、聖書の中で出てきますが、だからといって不思議な夢がいつもそうだとはいえません。

およそ人々が夢や「神の託宣」などということに関心を向けるのには、その背後に何かの危機が迫り、それと相まって社会がひどい抑圧状況に置かれている場合が多いように思われます。この場合には、バビロンが攻めてくるという恐怖に覆われていました。そのような不安な状況で、自分たちには「エルサレム神殿」と「ダビデ王朝」への神の祝福があるから大丈夫だという、楽観的で断定的な言葉によって安心したかったのです。それで、人々の願望に沿うような言葉を「神の託宣」として語る、偽りの預言者たちが歓迎されていたのでした。それで神は、もはや「主の託宣」という言葉を使ってはならないと禁じられ、「主は何とお語りになりましたか」と、謙虚に主の言葉に聞くように命じられました。

それは、エレミヤがこれまで語ってきたように、今迫っているバビロンの脅威は、長年のユダの罪と、それを警告されてもなお悔い改めなかった頑なさに対する神の裁きとして避けられない。だから「自分の国は自分で守るのだ」などと言って戦うのではなく、降伏するのが、悔い改めの態度なのだという事でした。

迫りくる脅威の中では、自分たちはどうなるのかという未来への不安ばかりが募り、とかく未来のことを言い当てるような断定的な言葉ばかりに関心が向けられます。しかし、そのような時こそ、自分たちの過去と現在のあり方を、神の御言葉の光に照らされて検証し、神と隣人の前に真摯に悔い改める、という態度こそが求められているのではないのでしょうか。

今起こっている悲惨な戦争や闘争、緊張を孕んだ国際状況は、かつての欧米や日本の植民地統治とそれらの利権をめぐる戦争という罪、それらの事後処理もまた支配権の争いに左右されるという不公正な、いまだに続いている戦後責任が深くからんでいると言えます。

そうした中で、わたしたちもまた、自分たちの過去と現在のあり方を、「近い」者だけに通用するなれ合いの理屈や狭い視野ではなく、「遠くからの神」「天地を満たしておられる神」の前に問い直すことが欠かせない態度ではないのでしょうか。

それが、40節で言われているように、「そしてお前たちに、決して忘れえない永久の恥と永久の辱めを与える」という、主なる神の峻厳と慈愛に満ちた警告に、わたしたちもまた

真摯に応えていくことだと思います。

最後に、ローマの信徒への手紙の一節をご一緒に読んで終わりいたします。

ローマの信徒第1章の後半から、パウロは人間の罪を指摘したうえで、「このようなことをする者を裁きながら、自分でも同じことをしている者よ、あなたは神の裁きを逃れられると思うのですか。あるいは、神の憐みがあなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と寛容と忍耐とを軽んじるのですか」(ローマ2:3, 4)、と問いかけています。

また、イエスを救い主として信じなかった多くのユダヤ人について、異邦人であるローマの信徒たちに対して「ユダヤ人は、不信仰のために切り取られましたが、あなたは信仰によって立っています。思いあがってはなりません。むしろ恐れなさい。神は、自然に生えた枝を容赦されなかったとすれば、恐らくあなたをも容赦されないでしょう。だから、神の慈しみと厳しさを考えなさい。倒れた者たちに対しては厳しさがああり、神の慈しみにとどまるかぎり、あなたに対しては慈しみがあるのです。もしとどまらないなら、あなたも切り取られるでしょう」(ローマ11:20-22)。(了)